年頭のご挨拶

島村宜伸会長

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体の皆様には、御家族共々、良いお正月をお迎えのことと拝察致します。

また、旧年中は、本協議会の活動に、多大の御協力、御支援をいただき、心から厚く御礼申し上げます。

加うるに昨年は、英霊の志を継承する会とハワイ明治会の方々に新たに正会員として御加入いただき、本協議会正会員団体は、四十一団体を数えるに至りました。また、キャリアコンサルティングはじめ七個の団体・企業の皆様に、特別会員として御加入いただき、現在の特別会員総数は十四個を数えます。個人賛助会員についても、新たに二十一名（十一月末現在）の方々に御入会いただきました。戦没者慰霊に寄せられる皆様の熱い思いに感銘を受け、皆様の御期待に背かぬよう、この国の戦没者慰霊事業の更なる推進に邁進することを、私ども一同、改めて心に誓うものであります。

また昨年は、戦没者の慰霊活動にとって、幾つかの喜ぶべき出来事がありました。

まず、安倍総理の靖國神社参拝（一昨年末）がありました。内外からの謂われない反対を押し切っての毅然たる姿勢での安倍総理の靖國神社参拝が実現し、これに対する世論の多くが好意的であったことも嬉しいことでした。また八月十五日には、総理の参拝こそありませんでしたが、十七万人を超える人達が靖國神社を訪れ、さしたる混乱もなく粛々と参拝がなされたこと、同慶の至りであります。

更に七月には、安倍総理のパプアニューギニアにおける「ニューギニア戦没者の碑」参拝がありました。我が国が海外に建立した戦没者慰霊碑への総理大臣による公式参拝は戦後初めてとのことで、安倍総理の戦没者慰霊への思い入れに、改めて感銘を深くした出来事でした。

また、十月には、海上自衛隊の練習艦隊が、ガダルカナル島を訪問し、戦没者の御遺骨一三七柱を収容して帰国しました。海上自衛隊の艦艇が、先の大戦での戦没者の遺骨帰還に加わったことも戦後初めての例とのことで、海上自衛隊の儀仗をもって帰国を果たされた戦没者の御霊もさぞやお喜びのことと拝察する次第であります。

靖國神社奉納大絵馬

靖國大絵馬は、愛知県名古屋市伊勢絵馬協賛会安田識人氏から御祭神奉慰のため、昭和五十三年から毎年奉納いただいているもので、横二・七六メートル、高さ二・一九メートルのジャンボ絵馬として新春の靖國の名物となっている。

慰霊

題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 33 号

公益財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073　千代田区九段北3-1-1
靖國神社遊就館内・地階

電　話　03（6380）8943
ＦＡＸ　03（6380）8952

http://homepage2.nifty.com/ireikyou

振替口座　00140-6-334930

編集人　飯田正能
発行人　岩田司朗
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

目　次

年頭のご挨拶（島村宜伸会長）……1
千鳥ケ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭……3
海上自衛隊による御遺骨の帰還……6
ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動に参加して……7
戦後初となる「政府主催遺骨引渡式」に参列して……8
英霊に誠を尽くす遺骨収集……9
パラオ諸島の戦いと慰霊……10
協議会参加団体の紹介……14
「ハワイ明治会」……15
事務局からの報告等……15

加えて、戦没者慰霊に大御心をかけられる天皇陛下の強い御意志の下、近々天皇、皇后両陛下のパラオ諸島慰霊御訪問が検討されているとの報道があります。また、自由民主党内に設置された戦没者遺骨帰還に関する特命委員会が年余にわたる検討を経て、戦没者遺骨収集推進に関する議員立法の国会提出を準備中との情報も聞かれます。その実現を大いに期待しているところであります。

さて、今年は大東亜戦争が終結して七十周年の節目の年に当たります。七十年と言えば、二十歳で出征され、復員された方々が九十歳、戦後に誕生され、戦争の記憶のない人達ですら七十歳を迎えられる年であります。この長い歳月の中で、国民の多くが世代交代し、平和と繁栄の日常に身を堕して、大東亜戦争の戦没者の記憶も忘れ去られようとしております。しかしながら、私どもが今日享受する平和と繁栄が、この国と民族のために苦しい戦争を戦い、雄々しく散って逝かれた戦没者の尊い犠牲が礎となって築かれていることを、決して忘れてはならないのであります。この終戦七十周年の節目の年に当たり、改めて大東亜戦争の戦没者の尊い犠牲を思い起こし、慰霊の誠を捧げ、それを次の世代に伝えていくため、私ども協議会が果たすべき責務の重要性に思いを新たにするものであります。

本協議会は、事業項目の第一項目に「戦没者崇敬に関する思想の普及」を掲げております。新しい年の全ての事業の展開においても、戦没者慰霊思想の普及啓蒙、とりわけ、戦争の記憶のない若い世代への啓蒙に狙いを定めて努力して参りたいと存じます。

また、本年も例年同様、七月に本協議会参加団体及び協力団体の合同の形で大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を執り行います。高齢化が進み、解散を余儀なくされた戦没者慰霊団体についても、永代会員として、そのお名前を連ね、共に慰霊顕彰の誠を捧げていただく形を、引き続き大事にしたいと思います。諸団体におかれましても、各団体の行う慰霊事業の次の世代への継承の工夫など、戦没者慰霊事業永続のための協議会への御提言、御要望がありましたら、是非お聞かせ下さるようお願い申し上げます。

なお、戦没者の御遺骨帰還事業は、政府派遣遺骨収集団に民間公募団体が参加する形で毎年続けられておりますが、本協議会は今年も遺骨帰還事業団体として応募し、御遺骨を一柱でも多く故国にお迎えするため、力を尽くしたいと思います。関係諸団体におかれましては、例年に変わらず要員派遣等に御協力を賜りますようお願い申し上げます。また、戦没者の御遺骨帰還のため、目下国が検討中の施策の促進についても、協議会として出来る範囲の精一杯の努力をして参りたいと思いますので、関係諸団体の御協力をお願い申し上げます。

旧年を回顧し、新年への願いを思いつくままに記しました。私自身、これらを頭に思い描きながら、心新たに、年頭の靖國神社の神前に額ずきたいと思います。

本年も、皆様の御協力と御支援を、よろしくお願い申し上げます。

平成二十七年元旦

公益財団法人
大東亜戦争全戦没者
慰霊団体協議会
会　長　島村　宜伸

謹賀新年

公益財団法人　偕行社

理事長　志摩　篤
副理事長　塩田　章
副理事長　戸塚　新
副理事長　深山　明敏
専務理事　白石　一郎
事務局長　若木　利博

公益財団法人　水交会

会　長　藤田　幸生
副会長　古庄　幸一
理事長　齋藤　隆
副理事長　田内　浩
専務理事　赤星　慶治
事務局長　本田　宏隆

公益財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会　長　島村　宜伸
理事長　柚木　文夫
専務理事　圓藤　春喜
事務局長　岩田　司朗

株式会社　SNA

株式会社
キャリアコンサルティング

特定非営利活動法人
孫子経営塾

軍学堂

謹賀新年

公益社団法人　隊友会

会長　西元徹也
理事長　先崎一
常務理事　増田好平
常務理事　吉川榮治
常務理事　吉田正

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長　杉山蕃
副理事長　藤田幸生
専務理事　衣笠陽雄
事務局長　羽渕徹也

航空自衛隊退職者団体　つばさ会

会長　遠竹郁夫
副会長　杉山弘
副会長　藤川壽夫
副会長　山本修三
副会長　吉田正
専務理事　菊川忠継
副専務理事　長島修照

一般社団法人　日本郷友連盟

会長　寺島泰三
副会長　西元徹也
副会長兼郷友総合研究所長　倉田英世
専務理事　新井光雄
常務理事兼編集者　勝木俊知
常務理事兼事務局長　中村弘
常務理事　冨田稔

医療法人社団　伍光会

株式会社　青林堂

同台経済懇話会

株式会社　防衛システム研究所

株式会社　リエイト

平成二十六年度
千鳥ケ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭

千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会

平成26年10月17日（金）、爽やかな秋晴れの下、千鳥ケ淵戦没者墓苑において、当奉仕会主催の本年度秋季慰霊祭が常陸宮、同妃両殿下の御臨席の下、厳粛盛大に執り行われた。

この日六角堂には、常陸宮殿下御下賜の大花籠が飾られ、その両側には、内閣総理大臣、衆参両院議長、最高裁判所長官、各省大臣、各都道府県知事他各方面からの生花が並べられ、また前列には果物、日本酒など供物が整然と供えられた。

式典は13時、常陸宮、同妃両殿下が御臨場になり、開会が宣言され、国歌「君が代」斉唱、次いで表千家流佐藤久仁氏による献茶の儀が行われた。

その後、堀内光雄奉仕会会長が式辞（別掲）を述べた。堀内会長は式辞の中で、先の大戦において国難に殉じられた戦没者に対し、心からなる感謝と哀悼の誠を捧げると共に、慰霊奉賛の灯火を次の世代へ伝えていくと固い決意を述べた。

この後、吉永洲神氏（尺八・岡田純明氏）が昭和天皇の御製を、吉野一心氏（龍笛・逢坂龍信氏）が今上陛下の御製を朗々と吟じた。続いて児童合唱団「音羽ゆりかご会」の皆さんによる「海ゆかば」など唱歌の斉唱があったが、児童のさわやかで澄みきった歌声は、吟詠と共に英霊にもしっかり届いたものと思われた。

この後、安倍晋三内閣総理大臣の追悼の辞（別掲）を、代理・衛藤晟一総理大臣補佐官が代読されたが、その中で安倍総理は、戦没者の御霊に心から哀悼の意を表されると共に、今なお海外に眠っておられる方々の御遺骨を1

式辞・堀内奉仕会会長

常陸宮、同妃両殿下御拝礼

日も早く祖国日本にお迎えするよう政府一体となって取り組んでいくとの決意を述べられた。

その後、参列者一同起立するなか、常陸宮、同妃両殿下が墓前に進まれて戦没者に御拝礼、黙祷を捧げられた。この間参列者一同も両殿下と一緒に拝礼、黙祷して、慰霊の誠を捧げた。

続いて陸海空自衛隊の各代表部隊が音楽隊と共に威容を整えて整斉と拝礼した。式典の最後に、祭主の奉仕会会長、総理大臣代理他参列者の献花が行われた。

今年度の慰霊祭には、英・仏・独・インドネシアの駐日大使など九ヵ国の大使館からのご参列があった。

式　辞

本日ここに、常陸宮、同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、御遺族及び御来賓多数の御参列を頂き、ここ国立千鳥ケ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭を挙行できますことは、誠に感激に耐えないところであります。

今年は終戦以来六十九周年を迎えました。先の大戦におきましては、若者を始め多くの同胞が祖国の安泰を念じて戦場に赴き、勇戦敢闘、戦火に散り、或いは辺境の地に於いて抑留中に一命を失った人も少なくありません。更に又、少なからざる一般邦人の方々が戦闘に参加して、痛ましくも命を失いました。祖国を離れ遠い異国の地で、愛する家族を、そして故郷の山河を想いながら貴い命を国のために捧げられた戦没者の心を思うとき、万感胸に迫り筆舌に尽くし難いものがあります。又一方で愛しい方々を失われたご遺族のご心情を察するに、今なお耐え難い深い胸の痛みを覚えるのであります。

今日私達は、平和で豊かな生活を享受しておりますが、それが戦没者の方々の尊い犠牲の上に築かれたものであり、英霊のご加護があったことを片時も忘れてはならないと思います。

ここに、謹んで国難に殉じられた戦没者の方々に心からなる感謝と哀悼の誠をささげ、ご冥福をお祈り申し上げる次第であります。

当千鳥ケ淵戦没者墓苑には、現在、海外で戦没された方々の御遺骨三十六万九十六柱が奉安されておりますが、ご遺骨収容の努力は今なお続けられておりますが、今日未だ海外に眠る百十三万の多くの遺骨があり、一日も早いご帰還をご遺族の皆様と共にお待ち申し上げているところであります。

私ども、公益財団法人千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会は、本墓苑に奉安されているご遺骨は先の大戦で亡くなられた全戦没者を含めた方々のご遺骨を象徴するものであるとして、当墓苑が戦没者の慰霊奉賛の場となるよう努めてまいりました。

幸い関係各方面の温かいご理解も得られ、その実現にご協力を頂いておりますことに、深く感謝申し上げる次第であります。今後とも、千鳥ケ淵戦没者墓苑が、先の大戦の全戦没者の慰霊奉賛の灯火を守る国民的聖苑として、これを力強く次の世代へと伝えるべく努力を続けて参りたいと考えております。

終わりに今一度、戦没者の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げますと共にご遺族の皆様のご健勝を祈念し、式辞といたします。

本日は誠に有り難うございました。

平成二十五年十月十八日

（公財）千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会

会長　堀　内　光　雄

ご参列の各国大使

常陸宮、同妃両殿下

追悼の辞・総理大臣（代理衛藤総理補佐官）

追悼の辞

本日、常陸宮、同妃両殿下のご臨席の下、千鳥ケ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭が挙行されるに当たり、謹んで追悼の言葉を申し述べます。先の大戦では、千鳥ケ淵戦没者墓苑に眠っておられる三十六万余の方々を始め、多くの方々が、祖国を想い、愛する家族を案じつつ、遠い異郷に亡くなられました。今日の我が国の平和と繁栄の陰に、戦没者の方々の尊い犠牲があったことに想いを致し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

来年、戦後七十周年を迎えることとなる今日、未だ多くのご遺骨がふるさとへのご帰還を果たされていません。国の責務として、一日も早く祖国へお迎えすることが出来るよう、政府一体となって取り組んでまいります。私達は、歴史に謙虚に向き合い、その教訓を深く胸に刻みつつ、先の大戦の記憶を次の世代に継承していかなければなりません。今後とも、世界の恒久平和の実現に全力を尽くして貢献していくことを誓います。

終わりに、戦没者の御霊の安らかならんことを、そして、ご遺族の皆様のご健勝を心からお祈りし、私の追悼の言葉といたします。

平成二十六年十月十七日

内閣総理大臣　安　倍　晋　三

（代読　内閣総理大臣補佐官　衛藤晟一）

献茶の儀・佐藤久仁先生

御製奉唱・吉永、岡田両先生

御製奉唱・吉野、逢坂両先生

合唱・音羽ゆりかご会の皆さん

自衛隊統合・陸上・海上・航空各幕僚長

海上自衛隊による御遺骨の帰還

平成26年９月19日、この度の海上自衛隊遠洋練習航海部隊のガダルカナル島ホニアラ港寄港に伴い、同島にて収容された御遺骨１３７柱が同航海部隊に引き渡された。

引渡式典で、御遺骨は、海上自衛隊の儀仗隊の栄誉礼で迎えられ、ガダルカナル島において遺骨収容に当たっていた遺骨収容自主派遣団員から引き渡され、自衛隊の艦艇による御遺骨の祖国帰還が実現することになった。

政府の要請により、海上自衛隊輸送による遺骨帰還が初めて実現したものである。今般の遺骨収容には、全国ソロモン会が実施する自主派遣に、ＪＹＭＡ日本青年遺骨収集団の学生７名が参加し、新たに39柱が収容された。因みにＪＹＭＡのガダルカナルにおける自主派遣は、平成23年度から実施されており、今回で４回目である。

戦後初めて御遺骨の祖国帰還に当たった練習艦隊は、10月24日、晴海に入港、同埠頭において、厚生労働省主催による遺骨引渡式が実施され、海上自衛隊から厚生労働省に遺骨が引き渡された。

ソロモン諸島ホニアラ港での引渡式（９月19日）

同　左

ソロモン諸島ホニアラ港での引渡式

東京晴海埠頭での引渡式（10月24日）

東京晴海埠頭での引渡式（10月24日）

同　左

「編注・次の2編は、ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動に参加された靖國神社の神職お二方の報告記で、靖國神社の社報『靖國』第712号（平成26年11月1日発行）に掲載されたものであるが、お許しを得て転載させて頂いた。」

ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動に参加して

靖國神社主　勝又　寛晶

9月6日より20日までの15日間、全国ソロモン会、JYMA日本青年遺骨収集団、第二師団勇会を活動母体とするガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動第四次自主派遣隊が結成され、後半の8日間、林権宮司と2名で同隊に参加した。

13日夜に成田空港を出発し、ポートモレスビー空港経由で、翌14日午後2時頃、ガダルカナル島、ホニアラ空港に到着。1週間早く現地にて活動を展開していた先発隊に合流した。この日は、先発隊が前半の活動で収容した御遺骨の洗浄（洗骨作業）をしており、これを手伝うこととなった。竹ベラを使って御遺骨に付着した土をそぎ落とす作業だが、骨は経年により脆くなっており、少し力を入れただけで簡単に崩れてしまう。それでもその大きさや形状から、若い男性の骨であることは容易に判断でき、神社での奉仕だけでは実感することのできない、失われた命の重さを噛み締めることとなった。洗骨は黙々と進められ、気が付けば数時間が経過していた。

現地に到着して2日目の15日、早朝から遺骨収集のため山奥に先発隊が設置した野営地に移動した。事前調査により遺骨が埋没する場所はある程度目処が立てられており、今回は野戦病院跡付近の密林に入り、現地住民の協力を得ながら収容活動を行った。

何人かのグループに分かれて無線機で連絡を交わしつつそれぞれ目的地に向かう。密林の中は蒸し暑い上に、足場も悪く、ほんの数分単独行動をしただけで復路が判らなくなるほど鬱蒼としていた。鋭利な刺を持った植物や、マラリア蚊の脅威もあり、現代の装備をもってしても、当地での活動は非常に困難である。補給も無いまま、兵装を抱えてこの密林を進んだ先人達の労苦は筆舌に尽くし難い。作業場には目印となるものは全くないため、ビニール紐で区分けされた区域を順に作業する。手伝いをしてくれる現地住民は、土の感触や草木の生え方で、御遺骨が埋まっているかどうか判断できるそうで、ブッシュナイフを器用に使って木の根を断ち、土を掘り起こしていく。30センチ程掘ると、少量の骨片が見付かり、彼らは手作業で小さな骨のかけらまで丁寧に拾い集めてくれた。御遺骨の大半は土に還ってしまっており、大きな骨でないと体のどこの部分かを判断することは難しい。更に、数十年に及ぶ風雨に因って遺骨は四散しており、この日も下顎骨を発見したものの、その後は細かな骨片ばかりで、全身の骨を収容するには至らなかった。

午後、暗くなる前に密林から引き上げ、野営地で1泊する。夜はスコールに降られてしまったが、少しだけ雨雲が晴れた時間があり、南半球の星空を眺めることが出来た。星座の並び方が日本と違うことが素人の目にも判る。

収容された御遺骨の焼骨式

この地に斃れた御祭神も同じ星々を御覧になられたのかと思うと、涙を禁じ得ない。

一夜明けて16日、野営地を撤収し、活動に協力してくれたバラナ村を表敬訪問。戦友の方がこの地で遺骨収集をする時から協力してくれた先代の村長の墓をお参りした後、村人達と別れ、ホテルに戻った。

17日、早朝より島西部のコカンボナ村に向かう。この村にあるソロモン会をはじめとする四基の慰霊碑の前を斎場として、先日洗骨した全ての御遺骨を井桁に組んだ薪の上に並べ、政府主催の焼骨式が執行された。式典後、御遺骨を荼毘に付している間に日蓮宗の僧職による慰霊法要、続いて靖國神社神職による慰霊祭を奉仕した。祭典中には、JYMAの学生による祭文奏上、参列者全員による「海ゆかば」、「故郷」の奉唱が行われる。村の住民達も言葉や祭式の意味は解らずとも、厳粛な雰囲気を感じ取ったのか、騒ぐこともなく、祭典の様子を静かに見守っていた。御遺骨が冷めた後、手作業で袋に収容し、ホテルに持ち帰り、再び安置した。

今回の派遣では、遺骨収集、戦跡巡拝、海外での慰霊祭、そして、この後実施された海上自衛隊への遺骨引渡式

と、非常に多くの経験をさせて戴いた。日本を守るため、尊い命を捧げられた御祭神の御恩に報いるべく、少しでも国家安泰の一助となれるよう努力していきたい。

戦後初となる「政府主催遺骨引渡式」に参列して

靖國神社権禰宜　林　紀孝

この度、ガダルカナル島遺骨情報収集自主派遣隊において、勝又主典と2名で一連の活動に参加したが、私からは、戦後初となる海上自衛隊による御遺骨の帰還の一連の行事などについて御報告したい。

焼骨式、慰霊祭の翌日、19日早朝、ホニアラ港に海上自衛隊練習艦隊が入港するため、その出迎えに行った。156日の行程で13ヵ国、15寄港地を巡る同艦隊には、今春、幹部候補生学校を卒業した初級幹部172名を含む約730名の自衛官が乗り組んでおり、去る5月22日に我が国を出港し、11番目の寄港地としてホニアラに入港した。

次第に岸壁に近づく艦艇に隊員達がそれぞれ手にした日の丸を振って出迎えると、練習艦「かしま」は吹奏楽団が「君が代行進曲」等を演奏しながら入港し、それに応えてくれた。一方、桟橋ではソロモン諸島を代表して現地住民が歓迎の音楽と踊りを披露しており、非常に賑やかな入港の一幕であった。

入港後間もなく、政府主催「遺骨引渡式」の全体リハーサルが実施され、午後1時から実際の式典が執行された。吹奏楽団が「海ゆかば」を吹奏する中、隊長以下御遺骨を奉持した11名の自主派遣隊が入場すると、整列した初級幹部達が御遺骨に対し一斉に「捧げ銃」の栄誉礼を捧げた後、合計137柱の御遺骨が自衛隊員に手渡され、式場正面に安置された。

その後、まず国歌斉唱。異国の地にて「君が代」が高らかに斉唱される。黙祷に続き、安倍晋三内閣総理大臣の追悼の辞を宇都隆史外務大臣政務官が代読。最後に参列者が献花を行い、御遺骨は自衛隊員によって練習艦「かしま」内の安置室（士官寝室）へと運ばれ、式典は終了した。御遺骨は練習艦隊と共に、10月24日に祖国へと帰還し、「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」に納められる予定である。先の大戦でガダルカナル島より生還された元陸軍軍曹・金泉潤子郎氏は、長年、遺骨収集のためこの地を訪れられているが、式典に参列された折「感無量」と語っておられた。この歴史的な引渡式に参列し、多くの人々が流した血と汗と涙を感じた時、私の感動も頂点に達した。

ホニアラ港にて入港を迎える隊員

戦後初にして、実に72年ぶりとなる我が国の艦隊のホニアラ港入港、そして、これまで航空貨物として運ばれていた御遺骨が、海上自衛隊の手によって帰国できることは、戦友のために長年活動を続けられた前記の金泉氏にとって何よりの慰めになったことと思う。

また、練習艦隊が日本を出向する前には、司令官以下初級幹部一同、恒例により毎年、靖國神社に参拝されており、本年も5月20日に昇殿参拝をして戴いた。政府が実施する遺骨収集事業に、初めて海上自衛隊が協力したことで、ようやく今回の遺骨引渡式が実現したのだが、これまでの道のりは、戦友をはじめ御遺族の方々にとっては非常に長く感じられたであろう。そのような思いを込め、現地にて、練習艦隊司令官の湯浅秀樹海将補に御挨拶し、御遺骨を無事に祖国日本まで運んで戴くよう切にお願い致した次第である。

この歴史的な式典が実現した裏側には、純粋な民間団体であるこの自主派遣隊隊長の崎津寛光氏をはじめ関係者の長年に及ぶ血の滲むような努力があり、そして、この活動に全面的に協力してくれる現地の人々と同隊の間に築かれた友好関係があることも忘れてはならない。是非この友情を永遠の絆として、今後ともこの活動を継続されたい。

ある御遺族から、出発前にお手紙を頂戴した。私への激励の内容と共に、70年を経た今でも、決して癒されることのない悲しみが綴られていた。また別の御遺族からの書簡では「遺骨が戦後三年経ってようやく戻ってきたが、箱の中には名前の書かれた木の札しか入ってなく、父の戦死を信じることなどできなかった」と、御遺骨と面会することさえ叶わなかった御遺族の悲痛なる想いを知った。そのような経緯から、私は今回の活動が、長年慰霊を続けてこられた多くの人々への「報い」となるよう常に心がけ、一生懸命に活動させて戴いた。今後もこの想いを常に持ち続け、英霊祭祀の御奉仕に邁進していきたいと思う。

英霊に誠を尽くす遺骨収集

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長（元統合幕僚会議議長）
杉山　蕃

「編注・本稿は「世界日報」（2014年8月24日）View pointに掲載されたものであるが、お許しを得て転載させていただいた。」

8月は、戦没者の慰霊に一入思いが深まる。終戦後69年、御遺族・戦友の方々の高齢化、少数化が進む中、戦没者慰霊は、次世代・次々世代へと移り変わっている。そんな中で先日、天皇、皇后両陛下のパラオ方面への行幸啓が来年（平成27年）実施されるべく検討が始まった旨報道された。誠に有り難い大御心である。さる慰霊行事の会合で、90歳を超えた旧軍人の先輩が「是非実現を」と、万感の思いを述べておられたのが印象的だった。今回は戦没者慰霊のうち、遺骨収集について所見を披瀝したい。

大東亜戦争戦没者の遺骨収集は、講和条約発効直後の昭和27年より営々と実施されている。厚生労働省の資料では、戦没者総数約240万柱、御遺骨収容数約127万柱で、回収率53％である。この数値は着々と積み重ねてきた実績だが、80～90％と言われる先進諸国に比し異常に低い数値であり、国に殉じた英霊に対し、日本人として全く申し訳ない数値である。

数値の低い原因は多々ある。遺骨の多くが、フィリピン、南太平洋島嶼の人口希薄な山岳・辺地にあること、特に戦争末期における徹底した洞窟陣地戦、海軍を主体に「死して屍を残さぬ」自爆思想が強かったこと、さらに大きな原因は、我が国の侵略性を誹謗し、遺骨収集協力に消極的な国があり、遅々として進まないこと等々であるが、何と言っても大きな原因は、戦後長く蔓延った我が国内の反軍・反戦の風潮が及ぼした戦没者慰霊の軽視にあったと考えている。

戦没者の殆どは、一般人を含めて召集に応じた一般国民であり、左翼と言われる人たちが目の敵にした「軍部」ではない。終戦直後の混乱した状況では種々困難な事象はあったものの、戦後69年、経済的にも社会的風潮的に健全化して久しい。この度、両陛下のパラオ行幸啓の計画に関連し、その大御心に深い感動を持ち、戦没者慰霊、特に遺骨収集事業に国民的盛り上がりを期すべきであろう。

遺骨収集の現状を述べてみたい。遺骨収集は厚生労働省が主管省庁となり、先述の如く昭和27年から行っている。遺骨情報に基づく収集計画により予算を獲得、日本遺族会、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会など慰霊関係法人を通じて毎年遺骨収集団を編成、現地に派遣し、収集・慰霊事業を行っている。実際現地に赴き、大変な作業を行っているのは、遺骨収集NPO、戦友会・遺族会関係者、現役・退職自衛官、学生を主体とするボランティアなど心ある人々だ。

なかでも学生を主体とするJYMA（日本青年遺骨収集団）、IVUSA（国際ボランティア学生協会）の積極的参加には正直、頭の下がる思いがする。先日、会合の休憩時間、学生参加者との会話時、「この事業に参加して良かったと思っています。アジアに向けて、歴史について目の前が開けた感じを有り難く思います。少々持ち出しの面もありますが、続けるつもりです」と爽やかに語ってくれた。是非とも彼らには将来大きく育ってほしいと心から応援する気持ちが込み上げた。彼らの活動は、慰霊・遺骨収集に留まらず、現地社会との交流、民生的協力に及んでおり、是非、中長期的計画のペースを上げ、十分な予算を支出して欲しいものである。

筆者は自衛官の出身であり、現職中はかなりの回数外国を訪問した。東南アジアでは、いわゆる「日本人墓地」「主要戦跡」で弔慰を表す行事にも参加した。それはそれなりの成果があったと考えている。しかし、退職後立場が変わって、私人、ボランティアの立場で慰霊巡拝を行い、数回にわたり東南アジア方面、マレー、シンガポール、ルソン、セブ、レイテ島の激戦地を回った。大変大きな感動と経験を得たが、最大の所見は、「戦跡を巡拝するなら、20代の若い時代に見ておきたかった」ということである。

帝国陸海軍が最後の決戦地としたレイテ島が、戦史を学んで予想した状況と異なり、「このような島だったのか」という大変衝撃的な所見、現地住民の誇り高い民族性など、若い時代に知見しておけば、考え方も随分変わったのではないかと考えている。そういう意

味からは、前述の学生ボランティアの方々は、若くして貴重な体験をし、自己形成の大変重要な部分を吸収しつつあるのである。

インターネットでＪＹＭＡのガダルカナル島「丸山道」の遺骨収集動画を拝見した。最も悲惨な戦場と言われる現場に挑む収集団の様子は感動的である。筆者の立場からは、自衛隊の幹部候補生は厳しい教程で訓練スケジュールは鮨詰めであろうが、自前の輸送手段を有することでもあり、遺骨収集を体験するのも大変良い教育になるだろうと考えている。是非一考いただきたいものである。

最後に、遺骨の残存する主な地域は、フィリピン35万、中国北部20万、中部太平洋17万、東部ニューギニア・ソロモン13万などだが、国内においても硫黄島にまだ1万を超える御遺骨が地中深く眠っていることを忘れてはならない。近年の収容遺骨数は、年間２０００～３０００といったオーダーであり、１００年かかっても終わらないとの声もある。また、ＤＮＡ鑑定の導入により、否定される遺骨も増えている問題もあるが、行幸啓に関連し、遺骨収集に対する考えを刷新し、世代交代を乗り越えて、異国に眠る英霊に誠を尽くすべきであろう。

パラオ諸島の戦いと慰霊

専務理事　圓藤　春喜

一　はじめに

天皇、皇后両陛下の予てからの御希望に基づき、戦後70周年となる今春、パラオ諸島など太平洋諸国への慰霊御訪問が検討されていることが発表された。今回は、この御訪問の中心となるパラオ諸島の戦いと慰霊について紹介したい。

二　パラオ諸島の地誌等

１　位置

日本の南方約３０００km、比島の東南方約８００km、マリアナ諸島（サイパン、グアム、テニアン島等）の西南方約８００kmにあり、比島攻撃の航空基盤に適した位置にある。

２　歴史

第一次世界大戦終了（１９１４年）まではドイツの植民地となっていたが、大戦終了後のパリ講和会議において日本の委任統治領となり、１９２２年には、南洋庁がコロール島に設置され、南洋諸島開発の中心となった。

第二次世界大戦後は、米国の信託統治領となったが、１９９４年にパラオ共和国として独立し、国連にも加盟している。

３　地誌

パラオ諸島は、２００余の島（内有人島は９島）からなり、最大の島はバベルダオブ島（以下「本島」という）であったが、当時の政治・経済の中心地は、隣接するコロール島に置かれていた。

ペリリュー島には大規模な飛行場があり、その北に隣接する島（ガドブス島）と本島にも飛行場があった。またアンガウル島にも爆撃機用の飛行場適地があった。

日本統治時代盛んに移民が行われ、１９４３年の人口は、約３万４０００人（約７割が移民）であり、砂糖黍や野菜栽培、漁業、燐鉱石採取に従事していた。

三　全般情勢

日本軍は、ガダルカナル失陥後の１９４３年９月、本土防衛上と戦争継続上の観点から、マリアナ諸島～パラオ諸島～ニューギニアを結ぶ線を絶対国防圏とし、防備を強化して連合軍の反撃を阻止、撃破しようとした。

絶対国防圏での最初の戦闘がマリアナ諸島の戦い（１９４４年６月中旬～８月中旬のサイパン、グアム、テニアン島）であり、次いで生起したのがパラオ諸島の戦いであった。

四　パラオ諸島の戦い

絶対国防圏に

指定されたパラオ諸島の防備を強化するため、１９４４年４月26日、関東軍で最強と称されていた歩兵第14師団を基幹とする部隊をパラオ諸島に配備した。師団は、その主力を本島及び政治経済の中枢であるコロール島に配備し、大規模飛行場のあるペリリュー島に水戸歩兵第２聯隊基幹の部隊（中川州男大佐指揮の１万６９５名）を配備した。

また、爆撃機用の飛行場適地のあるアンガウル島には、当初宇都宮歩兵第59聯隊基幹の部隊を配備したが、本島の防備強化のため、聯隊主力を７月下旬、本島に転用、歩兵第１大隊基幹の約１２００名で、米国の来攻に備えることとなった。

１　ペリリュー島の戦闘

ペリリュー島は、珊瑚礁に囲まれた南北約９km、東西約３kmのえびの頭のような形をした隆起珊瑚礁の島である。全般に低く平らな地形であるが、中央部には標高90ｍの大山を中心とする険峻な山地があり、自然洞窟、峡谷、断崖が発達した複雑な地形を呈している。

南部の平坦地には、大規模な飛行場があった。

中川大佐は、敵上陸直後の弱点に乗じ、海岸近くに配備した拠点陣地からの射撃、水際部に対する迫撃砲の集中射撃と反撃により敵部隊を撃滅すべく陣地を準備した。この際、マリアナ諸島の戦訓を生かし、敵の砲爆撃に耐えられる水際拠点陣地の構築、敵上陸地点に対する迫撃砲の不意急襲射撃と夜間の反撃を重視した。

また、島中部の山地部に自然洞窟、断崖等を利用した堅固な複郭陣地を構築し、長期持久に備えた。１０００人余の住民は、日本軍への協力を申し出たが、中川大佐は、住民が戦闘に巻き込まれるのを避けるため、米軍来攻前に本島に強制疎開させた。

一方、日本軍の戦力を正確に把握していた米軍は、圧倒的な海空戦力の支援の下、この戦闘に世界最強と称された第１海兵師団を投入した。ガダルカナル島の攻略で自信満々の海兵師団長は、「この戦闘は２～３日で終わる」と豪語していたとのことである。

米軍は、９月６日から事前の砲爆撃を開始し、15日早朝、第１海兵師団が島南西部の西浜から上陸を開始した。

日本軍守備隊は、当初過早な射撃を戒め、沈黙していたが、第１波の上陸部隊が水際部に蝟集したところに、不意の急襲火力を集中するとともに小部隊により果敢に反撃し、米軍に多くの損害を与え、更にその夜、１個大隊基幹の統一された反撃を加え、米軍に出血を強要するとともに、これを海岸付近に圧迫した。

米軍は、日本軍の反撃に一時混乱するが、後続部隊を続々と上陸させ、16

ペリリュー島の戦いにおける彼我の損耗

		日本軍	米軍
戦闘参加部隊		水戸歩兵第２連隊 歩兵第連隊第１大隊 歩兵第１５連隊第２大隊 （逆上陸）	第１海兵師団 第８１歩兵師団（部隊交代）
戦闘参加人員（名）		１０，４６８	４２，０００
損耗	戦死者（名）	１０，０２２	１，６８９
	戦傷者（名）	４４６（生還）	７，１６０
備考		３４名は、１９４７年４月まで戦闘を継続、生還	戦死傷者の他に数千人の精神疾患者が出ている。

日朝攻撃を再興し、夕には飛行場地区を確保、17日から複郭陣地に対する攻撃を開始した。

複郭陣地の戦いでは、守備隊は洞窟陣地を利用した巧みな火力と地形を利用した反撃により、米軍に出血を強要したため、米第1海兵師団は損害が続出、9月23日には、損害率が54％に達し、同30日には、全滅の判定を受け、アンガウル島を占領したばかりの陸軍第81歩兵師団との部隊交代を余儀なくされた。

一方、日本軍もペリリュー島守備部隊の苦境を見て、9月22～24日の間に本島の師団主力から1個歩兵大隊基幹の部隊を割いて島北部に逆上陸（一部海没するが、主力は無事上陸）させ、戦闘に加入させている。

この時点で、日米の主戦場は比島正面（10月20日米軍レイテ島上陸開始）に移っていたため、交代した米歩兵師団は、速度よりも着実性を重視して攻撃を再興し、守備隊複郭陣地に対する包囲網をじりじりと圧縮していった。

守備隊は、陣地を逐次蚕食されながらも、大山拠点で最後の抵抗を続けていたが、11月24日には弾薬・食料も尽き、これ以上の持久は困難と判断し、軍旗を奉焼して、「サクラ　サクラ」の訣別電報を打電した後、11月24日夜から27日朝にかけて最後の突撃を敢行して玉砕、70日余にわたる激戦にピリオドが打たれた。

この戦闘における日米両軍の損耗は、別表のとおりであり、初めて米軍に日本軍の損耗より多くの犠牲を強いた戦いであった。

ニミッツ米太平洋艦隊司令長官は「制海空権を有し圧倒的優位にあった米軍が最高の損害比率と1万人を超える犠牲者を出してこの島を占領したことは今もって疑問である」と述べ、守備隊の勇戦敢闘を称賛している。

なお、日本軍の残兵80名は、その後も抵抗を続け、終戦から1年8ヵ月後の1947年4月22日に、生存者34名が、日本人の説得に応じて米軍に投降し、矛を収めている。

2　アンガウル島の戦い

アンガウル島は、南北4km、東西約3km、北西部の高地（最高点標高60m）を除き、平坦であり、平坦地には飛行場適地があった。高地部には、無数の鍾乳洞が存在し、陣地に活用できた。

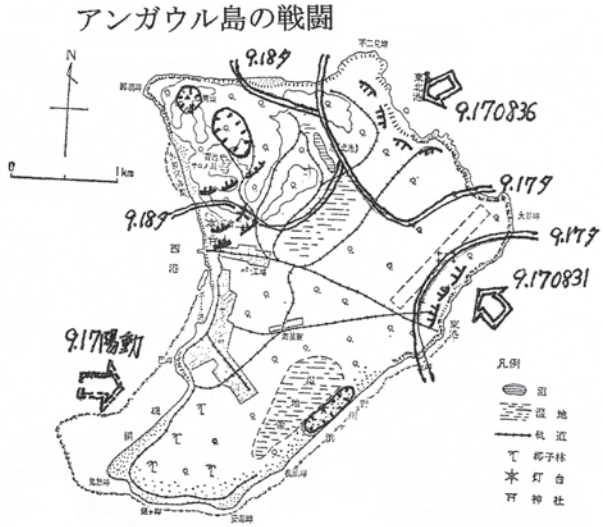
宇都宮歩兵第59聯隊主力が本島に転用された後のアンガウル島の防備を継承した第1大隊基幹の守備隊は、7月下旬以降聯隊の水際撃破の作戦構想を継承し、主力を海岸拠点に配置するとともに島北西部の高地に複郭陣地を構築し、米軍の来攻に備えた。

米軍は、アンガウル島攻略に歩兵第81師団を投入し、9月11日から7日間の事前砲爆撃の後、17日早朝島北部と東部の2ヵ所から上陸を開始した。

守備隊は、海岸拠点からの急襲射撃と迫撃砲の集中射撃、夜間の反撃により地歩の拡大を阻止しようとするが、続々と上陸する米軍には抗し難く、18日夕から島北西部の複郭陣地に後退し、洞窟陣地を利用した持久戦に転移した。複郭陣地では、洞窟陣地を利用した巧みな火力と反撃により、米軍に対し出血を強要するとともに、飛行場設定を妨害したが、衆寡敵せず、守備隊は逐次複郭陣地内部の拠点に圧迫されていった。

10月18日には弾薬・食料が欠乏し、これ以上の戦闘継続困難と判断した大隊長は、残存部隊を率い、10月19日夜最期の突撃を敢行し、玉砕した。

アンガウル島の戦いにおける彼我の



アンガウル島の戦いにおける彼我の損耗

		日本軍	米軍
戦闘参加部隊		宇都宮歩兵第５９連隊第１大隊	第８１歩兵師団
戦闘参加人員（名）		１，２００	２１，１００
損耗	戦死者（名）	１，１５０	２６０
	戦傷者（名）	５０（生還）	１，３５４
備考			戦傷者の他に約１，０００人の戦闘疲労、入院患者が出ている。

損耗は、別表のとおりであり、この島においても米軍に日本軍の損耗を上回る犠牲を強いている。その後、米軍はこの島に滑走路２本を有する重爆撃機用の飛行場を造成し、10月以降比島等の爆撃に活用した。

３　パラオ諸島のその後の戦い

その他の島に対しては、爆撃のみで上陸は行われなかったため、師団主力は本島等で終戦まで戦闘態勢を維持しつつ自活し、終戦を迎えた。米軍との終戦交渉後も軍の組織を維持したまま島に留まり、１９４６年３月までに本土に復員している。しかし、この間に栄養不良、疾病、米軍の爆撃等により、３０００名近くの兵員を喪っている。

復員部隊の中で、２月17日に横須賀市の馬堀海岸に米軍ＬＳＴで上陸した宇都宮歩兵第59聯隊は、階級章を付けた軍服姿のまま上陸し、21日にその姿のまま、戦後初の昭和天皇の行幸をお迎えする栄誉に浴し、陛下の御下問に対し、江口八郎聯隊長は烈々たる答申を行い、翌22日に解散して復員した。

パラオ地区の原住民は、日本人の引き揚げに当たり、日本の統治に感謝し、多数の者が涙をもって見送ったとのことである。

五　パラオ諸島における慰霊・顕彰

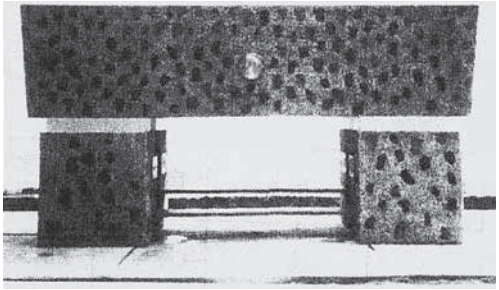
１　戦没者の遺骨収容

政府は、水戸第２聯隊戦友・遺族会等の協力の下、１９６７年から本格的にパラオ諸島の遺骨収容を開始し、別表のように、約１万６２００名の戦没者の内、２０１１年までに８８３０柱（55％）を収容・帰還させているが、大部分は、氏名が判明しないため、千鳥ケ淵戦没者墓苑に納骨されているとのことである。

最大の激戦地であったペリリュー島については、１万２００名の戦没者の内、７６１６柱（75％）を収容・帰還させている。

パラオ諸島の遺骨収容・帰還

	戦没者数（名）	収容・帰還数（柱）
パラオ諸島全般	16,200	8,830（55%）
ペリリュー島（内数）	10,200	7,616（75%）



国立西太平洋戦没者の碑

２　戦友会等による慰霊・顕彰

戦後パラオ諸島には多くの戦友・戦友会等が訪れ、慰霊行事を執り行うとともに、慰霊碑を建立し、戦友の慰霊を行っている。

民間建立慰霊碑は48基（平成18年度厚生労働省資料）確認されているが、この内、45基が州政府・地元住民により良好な状態に維持され、戦没者は手厚く祀られている。

また、水戸市の茨城県護国神社には、歩二会・ペリリュー島慰霊推進会が「ペリリュー島戦没者慰霊碑」を建立し、慰霊・顕彰を行っている。

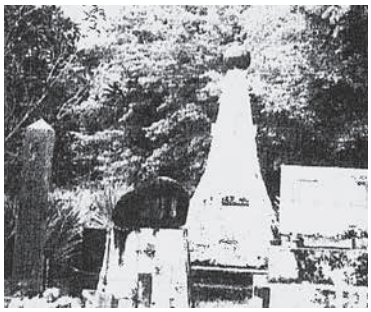
ペリリュー島戦没者慰霊碑
（水戸市・茨城県護国神社）

３　政府による慰霊・顕彰

１９７０年には、佐藤栄作首相（当時）とペリリュー島酋長との間で、慰霊碑建立と供養についての覚書が交わされ、１９７２年には、ペリリュー神社境内に慰霊塔「みたま」（納骨堂併設）が建立された。

１９８５年３月８日には、国立慰霊碑建設新構想に基づき、西太平洋の諸島で戦没された全ての方々を追悼し、

ペリリュー神社境内に建立されたニミッツ提督の詩碑。碑の両面に和文、英文で刻まれている。



ペリリュー島・慰霊碑「みたま」

平和への思いを込めて、ペリリュー島最南端のアンガウル島を望む位置に国立慰霊碑「西太平洋戦没者の碑」を建立し、慰霊・顕彰を行うとともに、付近一帯を平和公園とし、ペリリュー島州政府に管理を委託し、良好な状態に保持できるようにしている。

４　米軍の慰霊・顕彰

ペリリュー神社境内には、この島での日本軍との戦いに衝撃を受けた米太平洋艦隊司令長官ニミッツ提督が建立した碑があり、その碑文には、「諸国から訪れる旅人たちよ　この島を守るために日本軍人が　いかに勇敢な愛国心をもって戦い　そして玉砕したかを伝えられよ

米太平洋艦隊司令長官

C．W．ニミッツ」

と刻まれ、日本軍将兵の敢闘を称え、顕彰している。

六　終わりに

天皇、皇后両陛下のパラオ共和国御訪問が実現すれば、遠く南洋の島々で、祖国を思いつつ苛烈な戦いに身を投じ、散華された御英霊に、国民が寄せる縁（よすが）となるものと思う。また、平成27年度から予定されている戦没者遺骨収集事業の促進にも弾みがつくものと思われるので、御訪問の実現を、在天の御霊と共に切に期待したい。

協議会参加団体の紹介

⑯　ハワイ明治会

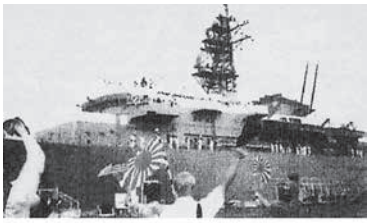
この度、初めて海外の慰霊団体である**「ハワイ明治会」**が当協議会に加入されたので紹介します。

ハワイ明治会は、第二次世界大戦をはさんで戦前、戦中、戦後を生き抜き、現在のハワイ日系社会の礎を築かれた明治生まれの気骨の士等２３０名が一同に会して、昭和33年11月２日に発足しました。

この会は、近代日本へと導かれた明治天皇の御聖徳を偲び、かつ、これまで幾多の艱難辛苦を乗り越えられたのは、幼児よりの、教育勅語に基づく徳育、知育、体育を重んずる教育のお蔭であり、この明治の精神、明治の魂を次世代に伝えていくことを使命として活動しています。

この活動の一環として、昭和47年には、ハワイ明治会が中心となり、総領事館、海上自衛隊、水交会、宗教団体等を始め、多くの日本企業のご協力を得て、マキキ墓地の一角に、ハワイへの初めての集団移民（この時期、ハワイは独立国であったが、まだ日本とハワイの移民条約は締結されていなかった。この人達は明治元年者と呼ばれている。）の方々の記念碑を建立した。

また、明治時代に任務半ばで亡くなられ、葬られている16柱の日本海軍将士の、傷みの烈しい墓を修復するとともに、これら16柱に加え、ハワイ海域に眠る多くの御英霊を敵味方なく招魂し、供養することを目的に、慰霊碑を建立し、墓地の名称も、現在の「マキキ日本海軍墓地」と改めている。



艦艇・航空機の歓迎行事

マキキ日本海軍基地

爾来、ハワイ明治会は、この墓地の維持管理等を担当しており、現在まで怨親平等、敵も味方もない全く平等の慈悲心で、それぞれの祖国に尽くされた英霊への崇敬、感謝の心で慰霊の誠を捧げている。

岩田陸上幕僚長の参拝

岩崎統合幕僚長（当時）の参拝

この墓地では、昨年まで、毎年8月15日の終戦の日に、仏式の盆法要を執り行って慰霊していたが、今年から、春には神式で招魂慰霊祭を執り行い、8月15日にはこれまで同様、仏式の盆法要を執り行って慰霊の誠を尽くしている。

その他、えひめ丸慰霊碑（カカオカ・ウォーターフロントパーク所在）、ジョン万次郎と共にハワイに到着し、4年後に病没された、十助さんのお墓（カネオへのグリンヘブンメモリアルパーク所在）の清掃等を地道にこつこつと、先人の志を受け継いで続けておられる。

また、会員の方々は、訓練や会議等でハワイを訪問する艦艇や航空部隊、高官等の歓迎行事への参加、マキキ日本海軍墓地に参拝される方々の接遇を続け、日米親善に貢献しておられる。

現在の役員は次のとおりです。

名誉会長　重枝　豊秀・総領事
名誉会員　高橋　裕昌・海自連絡官
会　長　早瀬　登
前会長　辻原　啓隆
副会長　ジェームス佐藤
書　記　神谷　龍典
会　計　辻　啓三郎、佐伯久美子
墓地管理整備部長　ケネス佐伯
理　事　荒　了寛、荒井　利政

事務局からの報告等

一　平成26年度臨時理事会の開催

平成26年10月30日（木）、当協議会会議室において、平成26年度臨時理事会を開催した。

本会議では、事務局からの提出議題等について、熱心な討議が交わされ、議案はそれぞれ原案どおり承認された。

1　議　案

○第1号議案―平成26年度上半期職務執行状況（報告）

○第2号議案―平成26年度上半期予算執行状況（報告）

○　懇談・報告事項

・　遺骨収集帰還事業促進化法案

・　内閣府立入検査受検結果

・　終戦70周年・協議会創立10周年記念事業

・　役員の選任

2　出席者

理事11名中10名及び監事1名が出席した。

二　平成26年度第2回慰霊諸団体連絡会議の開催

平成26年12月11日（木）、靖國会館「玉垣の間」において、平成26年度第2回慰霊諸団体連絡会議を開催した。

本会議では、遺骨収集帰還事業促進化法案、戦没者海外慰霊碑巡拝等について、活発な意見交換が行われた。

三　慰霊祭等への参加状況

1　市ヶ谷台慰霊祭

平成26年9月17日（水）、市ヶ谷台駐屯地メモリアルゾーンにおいて、偕行社主催の慰霊祭が執り行われ、当協議会から柚木文夫理事長他1名が参列した。

2　第63回特攻平和観音年次法要

平成26年9月23日（火）、世田谷山観音寺・特攻観音堂において、特攻隊戦没者慰霊顕彰会主催による第63回特攻平和観音年次法要が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

3　平成26年度秋季慰霊祭

平成26年10月17日（金）、千鳥ケ淵戦没者墓苑において、同墓苑奉仕会主催による平成26年度秋季慰霊祭が執り行われ、当協議会から島村宜伸会長、柚木文夫理事長他2名が参列した。

4　靖國神社秋季例大祭

平成26年10月18日、靖國神社秋季例大祭が斎行され、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

5　ソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭

平成26年11月3日（月）、千鳥ケ淵戦没者墓苑において、ソ連強制抑留戦友会東京ヤゴタ会主催によるソ連抑留犠牲者鎮魂慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事他1名が参列した。

6　慶應義塾戦没者追悼会

平成26年11月8日（土）、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにおいて、慶應義塾戦没塾員追悼会が執り行われ、圓藤春喜専務理事が参列した。

四　硫黄島遺骨帰還通常派遣事業への参画

平成26年度第7回派遣が10月10日（金）から同月24日（金）まで、第8回派遣が10月24日（金）から11月12日（水）まで、第9回派遣が11月12日（水）から同月21日（金）まで、第10回派遣が11月21日（金）から12月5日（金）までの間それぞれ実施され、当協議会からの派遣団員として、隊友会4名、水交会1名、つばさ会2名、計7名が参加し、御遺骨の収容に献身されました。気温摂氏60度以上の高温多湿、狭い洞窟内での収容作業で、体力の消耗が著しく、大変御苦労されたとのこと、お疲れ様でした。

今後の予定として、平成27年1月か

ら3月にかけて3回の派遣が計画されています。

新入会員名簿（敬称略）

（平成26年8月1日～11月30日）

【正会員】

・英霊の志を継承する会
（会長　宇井　豊）
（平成26年8月20日入会）

・ハワイ明治会
（会長　早瀬　登）
（平成26年11月20日入会）

【賛助会員】（五十音順）

浅沼正美　安部雅博
圓藤春喜　河野宏
菅野幸治　木房巧誠
小篠雪雄　園田智弘
谷脇智晶　古庄賢司
光安智敬　三浦誠哉
南　安広　渡邉幸衛
和田博温

【特別会員】（五十音順）

・（株）キャリアコンサルティング
（代表取締役　室舘　勲）
（平成26年8月11日入会）

・軍学堂
（代表　望月　太郎）
（平成26年8月28日入会）

・医療法人社団　伍光会
（理事長　肌附　英幸）
（平成26年8月29日入会）

・（株）SNA
（代表取締役社長　是松　義久）
（平成26年9月1日入会）

・（株）リエイト
（代表取締役社長　宮内　明）
（平成26年9月9日入会）

・（株）青林堂　（代表　蟹江　幹彦）
（平成26年10月14日入会）

賛助会員会費納入のお願い

本協議会は、会員の皆様からの貴重な会費で慰霊顕彰事業を運営しておりますが、皆様方のご理解と暖かいご支援なくしては活動を継続することが困難となります。

誠に恐縮に存じますが、平成25年度の賛助会員会費の納入につきまして、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本年度会費未納の方には、振込用紙を同封しております。当協議会の事務処理との関係から、その後のご納金と本お願いが行き違いになるかもしれませんが、その場合は、平にご容赦を賜りますようお願い申し上げます。

ご寄稿についてのお願い

当協議会では、広報誌『慰霊』を、年4回（一月、四月、七月、十月）発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的なご寄稿をお願い申し上げます。

ご寄稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協議会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協議会事務局宛としてください。

記

〒102―0073
東京都千代田区九段北3―1―1
靖國神社遊就館内・地階
（公財）大東亜戦争全戦没者
慰霊団体協議会事務局
電　話03―6380―8943
FAX03―6380―8952

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会は、会員の皆様からの貴重な会費により、戦没者の慰霊顕彰事業を運営しております。

当協議会の活動にご理解をいただき、慰霊事業の永続を図るため、多くの方々の当協議会会員ご加入をお待ちしております。

皆様のご協力をお願いいたします。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

一　賛助会員
（本会の趣旨に賛同する個人）
年会費　三〇〇〇円

二　賛助特別会員
（特別御芳志の賛助会員）
年会費　五〇〇〇〇円

三　正会員
（本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体）
年会費　一〇〇〇〇円

四　特別会員
（本会の趣旨に賛同する法人・団体）
年会費　一口一〇〇〇〇円
（一口以上）